

「自分の命は自分で守る」

校長 安藤 徹



今日から2学期が始まりました。しかし、この夏の暑さは記録と記憶に残るような厳しいものになりました。メディアではこの夏の猛暑を「災害レベル」と伝えているものもありました。



災害といえば、みなさんご存じのとおり今日9月1日は「防災の日」、そして9月1日を含む8月30日から9月5日までの1週間が「防災週間」となっています。岩戸養護学校でもこの2学期にはまず9月29日に全校生徒の避難訓練を、そして10月7日(金)8日(土)にはAB部門の1年生を対象に防災宿泊学習を3年ぶりに実施する予定です。

ところで、この9月11日で発生から11年6か月となる東日本大震災ですが、資料によると被害の大きかった岩手県釜石市内では小学生で1927名、中学生は999名の命が助かり、釜石市内の小中学生を含むこどもの生存率は99.8%だったということです。当時このことをマスコミは「釜石の奇跡」などと伝え賛美していましたが、釜石市の人たちは「これは奇跡なんかではありません。子どもたちが普段から訓練していたからこそできたことなのです。」と話しています。

震災当日、釜石市内の小中学校では、下校後の地震発生だったため児童生徒たちは誰の指示を受けることもなく自分で考え、判断し、安全に避難することを余儀なくされたそうです。一人で自宅に帰っていたところで地震に遭遇し、自分だけの考えで判断し自宅から自主的に避難場所に避難することができた小学生、揺れが収まったから大丈夫と避難しようとしないうちに津波が来るからと説得して何とか高台に避難して助かった小学生など、決して誰かの指示ではなく、地震発生時にそれぞれの児童生徒が自分の身体で感じたことをもとに、それまでの日頃の学校での学習や避難訓練などで学んできたことを生かして行動した結果、自分の命を救うことができたのです。

一方、同じく被害が大きかった宮城県石巻市の大川小学校では全校児童108名のうち残念ながら74名の児童が尊い命を落としたり、行方不明になってしまいました。大川小学校では地震発生時の2時46分には児童はちょうど「帰りの会」が終わるか終わらないかの時だったそうです。地震発生時には大部分の児童がすぐに机の下に頭を隠し、揺れが収まるのを待っていた(シェイクアウト行動)ようですが、中にはすでに下校を始めていた一部の児童は学校に戻って来てしまったという話です。

停電のため放送機器も使用できず、地震発生から15分後には校内にいた児童職員はとりあえず校庭に避難していたようですが、本来の避難場所である裏山の木々は倒れ、雪もあったため、裏山に行かず校庭に残るか津波を避けてどこかに逃げるか職員が迷ってしまった結果、避難を始めることができたのが地震発生から40分以上もたってしまったそうです。そして運命の3時37分には津波が児童職員を容赦なくのみ込んでしまったのです。

一瞬の判断の迷いや誤りがこのような悲しい結果を生んでしまったわけですが、これから何年、何十年たってもこのような事実があったことを私たちは忘れてはいけないこと、そして命の大切さや自然の計り知れない脅威の力をしっかり理解していく必要があると思います。そしてなんととっても「防災・減災の源」は「自分の命は自分で守る」ということだということも常に心がけていきたいものです。

令和4年9月1日